

sangaku news

産学ニュース

Vol.79 2021 JUN.

「産学ニュース」は今号より、従来の産学連携に関する情報と、Tokyo 新人デザイナーファッション大賞プロ部門 CREATORS TOKYO の活動報告に加え、毎号2本のインタビュー記事を掲載します。1本は建築からインテリア、グラフィック、ファッションまで、デザインの第一線で活躍するトップランナーに聞く「TOP INTERVIEW」。もう1本はファッションデザイナーに聞く「DESIGNER INTERVIEW」です。創造の源泉を紐解きます。

連続テレビ小説「おかえりモネ」のタイトルバックに、YUKI FUJISAWA デザイナーの藤澤ゆきさんがデザイン・制作した布が使われました！



YUKI FUJISAWA のアイコンともいえる「オーロラ」のテキスタイル

ヴィンテージアイテムを箔プリントでデザインすることで知られているファッションブランド YUKI FUJISAWA。箔プリントと同じくらいに、デザイナーの藤澤さんが大切にしているのが、オーロラをイメージしたテキスタイルです。5月からスタートした連続テレビ小説「おかえりモネ」のタイトルバックでは、舞台の1つである気仙沼の港などを疾走するヒロイン、永浦百音（演じるのは、清原果耶さん）の姿と共に、手染めされたオーロラテキスタイルを見ることができます！

「おかえりモネ」タイトルバック

<https://www.youtube.com/watch?v=1vIL4EW53fc>

YUKI FUJISAWA インスタグラム → @yuki__fujisawa

多様な身体をテーマにしたイベント「True Colors FASHION」によるオンラインファッションショーに、HATRA と kotohayokozawa がデザイン提供し参加！



HATRA デザイナーの長見佳祐さんデザインのトレンチコート

元・シアタープロダクツのプロデューサー、金森香さんがプロデューサーを務めたこのショーは、パフォーマンスアートを通じて、障害・性・世代・言語・国籍など、個性豊かな人たちと一緒に楽しむ「True Colors Festival - 超ダイバーシティ芸術祭」（日本財団主催）のプログラムで、去る5月30日からオンライン配信されています。異なる身体的特徴を持つ人々がモデルとなり、デザイナー・テック企業が集結。それぞれのモデルの個性と向き合いながらショーアイテムがデザインされました。CREATORS TOKYO からは、HATRA デザイナーの長見佳祐さんと kotohayokozawa デザイナーの横澤琴葉さんが参加。落合陽一さんを総合ディレクターに迎えたショーでは、多様性の理解はもちろん、ファッションが人の心と体に与えるポジティブな側面、そしてテクノロジーのサポートによって開かれる未来を予感させます。

「True Colors FASHION」

<https://www.youtube.com/c/TrueColorsFestival/>

*6月2日以降はノンカット版が「THEATRE for ALL」
(<https://theatreforall.net/>) でアーカイブ配信される

第1回目は、建築家の青木 淳さんです。国内外のルイ・ヴィトンのショップを手掛け、3月には銀座並木通り店がオープン。美術館の館長にも就任するなど、建築家という肩書にとどまらない青木さんの活動に注目したいと思います。デザインに取り組むときの気持ちや、時代に左右されず、変わらずに大切にしていることを伺いました。



建築家 青木淳さん（撮影：徳岡永子）

— オープンしたばかりの「ルイ・ヴィトン 銀座並木通り店」を見てきました！街の風景を受け止めながら、浮遊しているというか、静かに溶けているような様子が何とも不思議で、思わず外壁を触ってしまいました。後から「水の柱」がコンセプトと知り、納得しました。

不思議な物体ですものね。波打つように曲げたガラスでできていて、なにやらヌメッと揺らいで見えます。触りたくくなりますよね。同じところから見えても、天気や時間で、色がターキッシュブルーとオレンジとの間で交代します。雨が降っているのに、そこだけ晴れているように見えたり。仕掛けとしては、特注のダイクロイック加工を施したガラスを曲げるという、いたって工学的なものなのですが、それだけで自然にこんな現象が起きるんです。ダイクロイックというのは、可視光のうち、ある波長だけを選んで反射させる鏡のことですが、その結果、あんなに複雑な表情になります。夜の演出のためにも、自ら光らせるというはしていません。周りの建物の光を受けて、それを建物の表面がうまく打ち返すことで、夜景をつくっています。

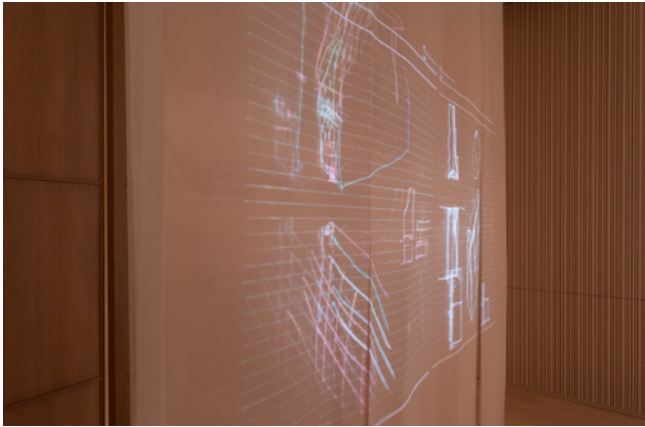
— 建築と洋服では根本的なところでは違うと思いますが、それでも、デザイナーや建築家が表現したいデザインのために丹念に素材を選ぶという点で、とても近いと感じます。

建物の外装に使える素材には、じつはあまり種類がないんですね。強度、耐火性能、耐水性能、経年変化などと、外壁に求められる条件をすべて満たすのは大変なんです。ガラスはそんな条件を満たす数少ない素材のひとつです。だから、ガラスの建築が多い。でもそうすると、町中の建物がどれも似たような表情になってしまいがち。でも、ガラスにはいろいろな性格が隠されていて、毎回、そのうちどれかを選んで表に出すようにしています。そんな意味では、素材も大切ですが、それをどのように扱うかもすごく大事ですね。



© 竹内吉彦

— 「ロロ・ピアーナ銀座店」で開催されていた展覧会『青木淳展— The Touch Of Architecture』も拝見しました。デザインが生まれていくプロセスやその断片を垣間見ることができて、小さいながらも充実した展覧会でした。特にファッション分野の人間として共感を覚えたのは、薄い布が幾重にも重なっているところに、銀座店の設計図やピキューナの姿といった映像が、ぼんやりと儚げに映し出されていたことです。



©Loro Piana

あの布は五重になっているんです。一番外側が生成りに近いオーガンジー、その後ろがブロンズ色のメタリックのオーガンジー、金色っぽい光沢があるんです。その後ろに薄い紗幕みたいなものがある、その後ろにも2枚、より、やや不透明な紗があります。

— **そこまでの種類があるとは分かりませんでした。その布に映し出された映像が、デザインの始まりの段階の、つかみどころのないモヤっとした感覚というか、その状態が表現されているように感じたのですが。**

まだはっきりと像を結ばない、頭のなかに浮かぶイメージをイメージとして感じてもらえれば、と思ってつくりました。デザインするときって、できあがるまでずっと結果は見えていないんです。ただ、この先にきっと到着点はあって、そこに辿り着いたときには、それを体験してきっとこんな気持ちを持つことになるだろう、と、その気持ちの状態だけが先に来るんです。で、その気持ちの状態を一度持てれば、いろいろ案を試すなかで、それがOKかどうか判定できるわけですね。言葉では言い表せないけれど、そんな感覚の鏡をまず、心のなかに持つことがデザインの出発点になっています。もちろん、そういう感覚を今度もつかめるかどうか、いつも不安っぱいのなか、新しいプロジェクトが始まるわけですが。

ロロ・ピアーナ銀座店では、やはり、あの生地のすばらしい肌触りが決め手でした。見ているだけではわからないのですが、ロロ・ピアーナの生地は、触れると、柔らかいような、しなやかなような、たおやかなような、張りがあるような、何とも言えない不思議な感覚に包まれるんです。そのとき感じる気持ちが、デザインの出発点でした。視覚ではなく触覚を通してもたらされるその気持ちを、物的・視覚的にどう達成するか…。矛盾する目標ですが、そういう不可能な課題の方が楽しいですね。いずれにしても、今回の小展覧会では、そんなデザインのプロセスのなかの気分をそのまま伝えたいと思いました。

— **コロナ禍で何かとても窮屈な気持ちになっていたのに、久しぶりにワクワクする、心が満たされるインスタレーションでした。青木さんの本を読ませていただくと、二つの大きな震災が建築というものを改めて考えるきっかけになったと書かれています。今回のコロナは天災とはまた違う現象ですが、ご自身で何か感じる変化はありますか？**

あるいは改めて思うこととか。世界的なお仕事を沢山していると、距離感の変化なども感じるのではないのでしょうか？

去年2020年の4月、非常事態宣言が出て、1ヶ月ほどスタジオを閉めました。10人ほどで仕事をしているのですが、皆に在宅でやってもらって、Zoomで打ち合わせをしながら仕事を進めました。でも、なかなか埒があかなくて、一度、スタジオに集まろうという話になり、ひと月ぶりに集まって、模型を囲んだんです。すると、一瞬で、この1ヶ月はなんだったんだ、と思うくらいに案を進展させることができました。やはり、模型を切ったり貼ったりしながらでない、案の良し悪しは判断できないし、新しい思いつきも出てこない。

ファッションデザイナーもそうではないかと思いますが、目の前にモノがあって、それを手でいじらないと、仕事にならない。そのことが身に染みてわかりました。それでゴールデンウィーク明けからは、従来通りの、スタジオに集まって仕事をするやり方に戻しました。スタジオのスペースは180㎡ほどあるので、単純計算すれば1人18㎡ほどになるので、幸い、三密はなんとか避けられる余裕がありました。僕が自分のスタジオを持ったのは1991年のことでしたが、組織を大きくはしたくなくて、ずっと10人くらいの数でやってきました。大都市のなかで、10人くらいの人間が毎日、ひとところで、場を共にして案を練る。スタッフは一応「四年制」で、育ったと思ったら「卒業」していきます。人が少しずつ入れ替わっていく。そういうなかで、徐々にプロジェクトが形になっていく。そういうことを続けてきたわけですが、静かに時が過ぎていく、こういう工房的なコミュニティのあり方は、もしかしたらコロナの時代にあっているのかもしれない、と今、思ったりしています。より大きな規模の仕事に向かうこと、より多くの仕事をこなすこと、より大きな組織にすること、ではなくて、小さく、ある意味で閉じながら、しかし同時に、遠い世界とつながること。コロナは災い以外のものではありませんが、せめて、いままでの常識とは違うものの見直しのきっかけとして前向きに捉えたいと思っています。

インタビュー全文は [note](#) へ▽

<https://note.com/sangakunews/n/n33e58bf7b5a7>

青木淳 Jun Aoki

1956年横浜生まれ。1991年青木淳建築計画事務所設立（現在はASに改組）住宅、公共建築をはじめ、国内外のルイ・ヴィトンの店舗も手がける。最新作に「京都市京セラ美術館」（西澤徹夫と共同設計）、「ロロ・ピアーナ銀座店」「ルイ・ヴィトン銀座並木通り店」などがある。著作に「原っぱと遊園地」、「フラジャイル・コンセプト」。

DESIGNER
INTERVIEW

TAAKK

TAKUYA MORIKAWA
森川 拓野

第1回目は TAAKK (ターク) デザイナーの森川拓野さんです。2012年にブランドを立ち上げ、現在9年目。2013年には「Tokyo 新人デザイナーファッション大賞プロ部門」(以下、ファッション大賞)に入賞。3年間6シーズンの支援を受けた後、「TOKYO FASHION AWARD」(以下、アワード)、「FASHION PRIZE OF TOKYO」(以下、プライズ)といった国内の名だたる賞を続けて受賞。さらに今年、世界中のデザイナーが憧れる「LVMH PRIZE 2021」(以下、LVMH プライズ)のセミファイナリストに選ばれるなど、話題に事欠かない存在となっています。ブランド立ち上げから現在までを、引っ越したばかりという東京・学芸大学にあるアトリエにて伺いました。



TAAKK (ターク) 森川デザイナー

— お久しぶりです。そして、LVMH プライズのセミファイナリスト選出おめでとうございます！ 息つく暇なく成果をあげていますが、今日は TAAKK (以下、ターク) 立ち上げ当時から、今までの話を聞けたらと思います。とても長いスパンですが、大変だったこと、嬉しかったこと、これで行けるなって思った瞬間など、お聞かせてください。

ブランド立ち上げのことですか？ いや～、基本大変すぎて、もう二度とやりたくないです、正直 (笑)

— 何が一番大変でしたか？

30歳で ISSEY MIYAKE (以下、イッセイミヤケ) から独立して、お金もないでしょ？ 貯蓄も100万円ぐらいしかなかった。会社は勢いで辞めてしまったので。とにかく自分のブランドがやりたかったから。いきなり自分のブランドだけで生きていけるとも思わないので、週何回かは企業デザイナーをやりながら、お金を稼がないと自分のブランドの服も作れないとは思っていました。でも、どこも決まらないんで

すよ。イッセイで働いていたと言ってもね。もちろん週3回で稼ごうってこと自体に無理があるって、今考えれば分かるんですけど。結局、土木作業の他に、薬を飲む治験のアルバイトとかやって。とにかくその間にサンプルを作っていました。会社を辞めたのが3月とか4月で、でも8月ぐらいにはサンプルが出来ていて、展示会とかやりましたね。はたから見たら、すごくちゃんとやっているように見えていたと思います。でも実際は毎日アルバイトして、ストレスで带状疱疹にもなるし、ひどかったです。でもそんなに頑張ったにもかかわらず、結局200万ぐらいしか貯まらなかった。それでサンプル作って個展をやったら、すっからかんで。

でもその個展の前に、当時、神戸に「ドラフト！」っていうセレクトショップバイヤーと若手デザイナーのマッチングイベントがあって。実は自分でお洋服作ったはいいけれど、どこでどうやって発表したらいいかも分からなかったんですよ。だから「ドラフト！」の話を聞いたとき、あれ実は関西圏のブランドを応援するプロジェクトで、縁もゆかりもないのに、応募したんですよ。そうしたら、やっぱり経験があるから、当たり前勝つんですよ。でもそれはすごいラッキーなことだったなって、今は思います。そうしたら縁もゆかりもない人たちが、みんな僕の服を「すごいいい」って言ってくれて。関西圏のビームスが契約してくれたんですよ。それが8月くらいかな。とりあえずビームスがついて、ホッとして。

— 勘が良いというか、導かれているというか。必死でありながら冷静な印象です。

「ドラフト！」からの帰り道、紹介されたショップに寄ったり。死に物狂いでしたよ。本当に大変だった。ビームス3店舗分のオーダーは量的には決して多くなかったけど。それで希望も出たから、自分で東京で個展をやったんですが、バイヤーさんが1人も来ない！！

— 個展の開き方とかは、何となく分かっていたのですか？

分からないです。だから手探りでバイヤーに電話して、自分で。そのたびに心が折れて。本当は合計10店舗ぐらい行って内心勝手に思ってたんですよ。それで東京で個展をしたけれど、結果「ドラフト！」で決まった3店舗だけだったから、世の中が甘くないこと、その個展で知りました。それがファーストシーズンでしたね。

— デザインからトワルを組んだり、パターンを引くといったことはご自分でもやろうと思えばできると思うのですが、その後の工程、たとえば布の手配とか縫製工場とのネットワークはすでにあったのですか？

縫製の工場はまったく知らなかったです。だからすべてイチからですね。友達に縫ってもらったりとか。人づてに工場を紹介してもらったりとか。イッセイって大きい会社だったから、技術者は技術者の仕事で、僕は企画者だったから、生地屋さんとか加工屋さんとかしか知らなかったんです。新規に生地を織るとお金かかるから、すでにある生地を後加工で何とか変化させて。大変だったなって思います。死ぬかと思いました。支払いは待ってくれないじゃないですか。

— 全部イッセイの時の経験とか関係性のなかで、準備出来ていたのだと勘違いしていました。

でもビームスがついたから、今度は銀行にお金の話をしに行行って。貸してもらえるように頑張りました。サンプルを作り終わった後だから、手元に本当に1円も無くて。銀行行くにも電車に乗るお金もなくて。これマジ？ 30代で、こんな惨めな思いするなんてって、ずっと思い続けてた時期です。何とか銀行に行行って、とにかくアピールをするわけです。「ファーストシーズンのコレクションでビームスがつきました。しかもイッセイで企画者をやっていました。そしてイッセイのバリコレに出てる服、俺作ったのはこれです」って、銀行にプレゼンして。そうしてお金を借りたわけです。

— 独立して一番大切なのは、お金の知識と思いますが、必要に迫られてマスターしたって感じですか？

イッセイの時は企画の、しかも限られた一部をやればよかったけど、独立したら当然そうはいかない。必要に応じて全部調べました。

— Tokyo 新人デザイナーファッション大賞プロ部門（以下、ファッション大賞）のことも、自分で調べて知ったのですか？

ファーストシーズンを見てくれた人たちから、ファッション大賞のことを教えてもらいました。それが2シーズン目の2013年ですね。

— 実際サポートを受けてどうでしたか？ ファッション大賞事務局側から言うと、森川さんは最初から手のかからない、しっかりしたビジョンのある人でした。

ファッション大賞は、ブランドの初期のサポートとしては一番いいと思う。本当に若くて何者でもない人たちにとっては、ありがたいと思います。展示会でコレクションを見てもらうことがメインの若手ブランドにとっては、会場費への金銭的サポートはすごいこと。自分はむしろ、それ以外求めてなかったって言うてもいいかもしれない。とはいえ、これまでの全部のカテゴリー（アワードとプライズ）が無かったら、今のタークは無かったと思います。



2013年ファッション大賞プロ部門ジョイントショーより

— ブランド立上げ初期は、とにかく人に見てもらう必要があるから、展示会が命ですよね。森川さんは人間関係にも恵まれていますね。他の媒体でのインタビュー記事を読むと、「チーム」という言葉が出てきます。

結局最後に助けてくれるのは、人間関係だと思う。デザイナーなんて何も出来ないから。だって自分で縫うわけじゃないし、パターンを引くわけでもない。指示はもちろん自分でするけど、一人でできることの限界ってやっぱりある。今は妻もいるし、アシスタントもいるし、いろんな人が支えてくれている。はたから見たら「ターク」って森川のことだけど、僕からすると森川じゃない。それこそショーをやるってなったら演出の人がいるし。音楽作ってくれる人には、次のシーズン(22SS)に向けてコンセプトだけ伝えて、アトリエで流す音楽まで作ってもらったりしています。そういった大きな支えがあって、初めてお洋服になるけど、今そういうことが言える環境になって良かったなって思っています。最初は僕しかいなかったし。全部一人でやってた。

インタビュー全文は [note](#) へ▽

<https://note.com/sangakunews/n/ne419504ca090>

森川拓野 Takuya Morikawa

1982年、神奈川県生まれ、秋田育ち。文化服装学院卒業後、株式会社イッセイミヤケに入社。企画デザイン担当などを経て独立。2012年、森川デザイン事務所を設立し、自身のブランド「TAAKK (ターク)」を立ち上げる。「LVMH PRIZE 2021」のセミファイナリスト選出。